

「英語音声学」の到達目標の評価

英語教育講座・池野修

1. 授業の概要

「英語音声学」は、英語オーラル・コミュニケーション指導の知識ベースの一つである英語音声学について学ぶ授業科目である。英語教員養成の一環として実施している授業であるため、単なる音声学の知見の紹介ではなく、英語授業における音声指導の改善につながる内容を目指している。

この授業の到達目標として、次の 12 を設定している。

- (1) 英語ネイティブと同程度である必要はないが、児童・生徒のモデルになりうる英語発音を習得している。
- (2) 英語発音に関して、自分の課題（＝改善が必要な点）を（より）具体的に理解している。
- (3) 英語による音声表現力が向上している。
- (4) 英語による音読・朗読の魅力を感じることができる。
- (5) 「音素」「ミニマル・ペア」「異音」「相補分布」などの音声学の基礎概念を説明することができる。
- (6) 英語と日本語の違いについて、音節言語（英）とモーラ言語（日）、閉音節言語（英）と開音節言語（日）、ストレス・アクセント（英）とピッチ・アクセント（日）、強勢拍リズム（英）とモーラ拍リズム（日）などを説明することができる。
- (7) 日本人英語学習者にとって、具体的に英語発音のどの特徴が困難点になるのかを理解している。
- (8) 子音強化トレーニング、English 575、特殊カナ（表記）の使用など、発音指導の様々なアイデアを理解している。
- (9) リスニング能力がどのような要素から構成されているか、日本人学習者にとってリスニングのどこが具体的に難しいのかを理解している。
- (10) 音変化（連結・同化・脱落）の現象について、どのようなパターンがよく見られるかを理解している。
- (11) ディクテーションのバリエーション（e.g. dictogloss）、ラウンド制タスク・リスニング、Listen and Retell など、様々なリスニング指導法について理解している。

- (12) オリジナルな英語リスニング教材を作成しそれを発表するという体験を通して、効果的なリスニング教材に関する理解が深まっている。

毎回の授業では、まず最初に 20～30 分程度音読トレーニングを行い、その後、音声学・英語発音指導・英語リスニング指導などについての講義・活動体験型学習・グループ学習を行った。音読トレーニングは、(i) その日の素材の音読上のポイントの解説、(ii) 受講生による音読練習と録音（CALL 機器を活用）、(iii) 受講生による自己評価／受講生同士による相互評価、(iv) <授業後>録音データの提出、(v) 担当教員による分析とコメント、(vi) <次週>担当教員のコメントを確認した上での再確認、というステップを踏んで実施した。発音指導法およびリスニング指導法については、様々な活動を担当教員が実演してみて、指導上の工夫と課題・改善について考察したり、関連の授業実践ビデオを見たり、課題リーディングなどを通して学んだりという形にした。

なお、今年度の受講生は 22 名であった。

2. 授業評価方法

この授業科目で設定した 12 の到達目標について、受講生の認識を調べるねらいで、最終授業でアンケートを実施した。「それぞれの目標はどの程度達成できたと思うか」という質問に対して、「1」（＝全く達成できなかった）～「5」（＝十分に達成できた）の 5 件法尺度で回答を求めた。この他にも、「あなたがこの授業科目の担当者であれば、どこをどのように変えるか。なぜか」という質問に答えるとともに、「授業の感想」を書いてもらった。これらの質問については、自由記述の形で回答を求めた。回答数は 22（全員）である。

3. 授業評価結果

まず「授業目標の達成度」に関する回答結果は以下の通りである。数字は回答者数を示している。

表 1. 到達目標の達成度の評価

	1	2	3	4	5
目標 1	---	1	10	11	---
目標 2	---	---		13	9

目標 3	---	---	2	15	5
目標 4	---	---	---	11	11
目標 5	---	---	8	7	7
目標 6	---	---	8	9	5
目標 7	---	---	1	17	4
目標 8	---	---	5	14	3
目標 9	---	---	6	16	---
目標 10	---	---	8	12	2
目標 11	---	---	5	12	5
目標 12	---	---	3	9	10

多くの目標において、多くの回答者が「4」を選択している。授業担当者の実感としては、目標 9 や目標 10 を除けば、より多くの受講生が「5」＝「十分に達成された」を選択すると予想していたため、少し残念な結果となっている。目標 1 と目標 9 に関しては、「5」がゼロであったが、前者に関しては「生徒・児童のモデルになりうる発音」という文言が少し強過ぎたことが原因であり、後者については、関連活動にほとんど時間を割けなかったためであると考えられる。(目標 9＝リスニングの構成要素については、その一覧表を配っておき、リスニング教材・活動に関するレポートにおいて、どの要素を強化しようとするのかを明示的に述べるように指示した。この課題は構成要素について深く考える機会にはなったはずである。) 目標 5 と目標 6 については、学期の前半でかなりの時間を使ってグループ学習・講義を行ったのであるが、「3」を選択している受講生が多い。学期末のアンケート回答時には、その記憶が薄れかけていたことが原因かも知れない。

受講生のおよそ半数が「5」＝「十分に達成された」を選択している目標としては、目標 4 (音読・朗読の魅力の実感) および目標 12 (効果的なリスニング教材・活動に関する理解の深化) があげられる。音読トレーニングにおける指導、受講生によるリスニング教材・活動の考案&発表という課題が効果的であったことを示している。

「あなたが「英語音声学」の授業担当者だとしたら、具体的にこの授業のどこをどのように変えますか。なぜですか。」という質問および「授業の感想」に対しては、受講生から次のような回答が得られた。(●は改善への提案を示している。)

- [音読トレーニングについて] 自分の話す英語を聞く機会が今まであまりなかったので、録音し、分析することはとてもよい活動であった。
- 最初は音読の提出が嫌でしたが、回数を重ねるごとに不思議と楽しくなってきた、家でも全力で練習するまでになりました。
- [音読トレーニングについて] 学生による相互

評価の機会をもっと増やしたい。(多数)
 ←多くの受講生が同様のコメントを述べており意外であったが、次年度は相互評価をより充実させたいと考えている。

- [音声学の基礎知識のグループ学習について]
 - ①自分が考えて書いてきた答えと、②グループの人が発表していた答えと③先生によるパワーポイントの説明の3点で私は混乱してしまうことがあった。③をもう少し明確に、いい時にして欲しいと思った。

←他の受講生からは同様のコメントはなかったが、グループ学習と担当教員による解説との関係がより分かりやすいように留意したい。

- リスニングの様々な方法について学ぶことができた。中高では、単に問題を解くだけだったが、この授業でいろいろなリスニング指導法があると分かった。同じ教材を使っても、生徒にどのような力をつけさせたいかで活動が違ってくことを理解した。

- 発音指導とリスニング指導があったので、できれば音声学 I と音声学 II に分けたい。

- この授業は 1 回生などの早い時期でしたいです。自分はこの授業を受けて発音記号などへの意識がより強くなったし、発音方法なども話す時に意識するようになりました。

←上記 2 つのコメントについて、理解はできるが、カリキュラムの変更は、教員の負担、キャップ制、その他の理由で簡単ではない。

- 学生が考えたリスニング教材は 2 時間くらいかけて共有すべきだ。

- この授業を受けてから発音のことをよく考えていて、アルバイトで中学生に英語を教えているときも、こういう問題があるとか、授業で習ったことが実際に見つかったりとか、自然に意識が向いていることがあります。

4. まとめ

今年度も、授業の(到達)目標を明示化し、目標-授業内容-評価の対応をチェックするように心掛けてきたが、そのさらなる検討が必要である。

「この授業科目で育成すべき、かつ現実的な知識・技能・態度とはどのようなものなのか」「それぞれの目標をどの授業活動で達成するのか」「達成状況はどのように評価するのか」といった根本的課題は残っている。知識・技能に関する目標の達成状況は受講生に対するアンケートだけではチェックできるものではない。ちなみに、今学期も音読テスト、レポートなどの他の評価方法も実施しているが、効果的で無理なく持続可能な評価方法についても模索を続けるつもりである。